

〔本朝世事談綺正誤〕印籠

笠澤筆塵三の卷曰、器物ノフカク打オホフ蓋ヲヤロウト云ハ、古藥籠印籠有リ、印籠ハ印判ヲ入レ、藥籠ハ藥ヲ入ル器也、藥ヲ風ニアタラヌタメニ、蓋ヲフカクス、ソレニナヅラヘテ、フタノ深く掛ル器ヲ皆藥籠蓋トス、ヤロウハ音ノ轉ゼル也、

〔安齋隨筆 前編十一〕一印籠藥籠

二ツともに唐物也、大サ定らざれども、大概徑三寸五分許にて、

重宮也、三重四重あり、飾ハ、堆朱、堆黑、螺鈿等種々あり、其形圓なるを藥籠と云、四方なるを印籠ト云、藥籠ハ藥入也、印籠ハ印と色を入もの也、今世も、右の二色此方へ渡りたるを傳へて、座席の飾、違棚などの置物にする也、此方にて、今世印籠と名付て、小キ重宮ノ兩傍に紐通しの管を作り付て、緒を通して、腰に付るハ、彼右に云ふ所の印籠藥籠を小クしたるが如き者也、されば藥を入れらるものを印籠と云ハ、名の唱へ違也、小キ物なれば、印ハ入られず、藥を入れる物なれば、藥籠とこそ云べけれ、又宮の蓋に、ヤロウブタと云ふものあるハ、右の藥籠の蓋の如く、宮の身の端をうすくして、蓋の内へ呑み入るやうにしたるを云也、奇異雜談六册と云書あり、古版也、今ハ絶版す、室町殿の代の人の記したる書にて、明應文明天文の年號見へたり、其書に、古キ堂の天井に、女を磔ハツケにかけ置たる物語の中に云、是を見ずんば有べからずとて、藥籠より火打蠟燭を取り出し、火をともし、天井にのぼりて見れば、女人を磔にかけてをけり云々、此藥籠ハ、蠟燭を入たるなれば、大なる物なるべし、腰に付たる由ハ見へず、旅僧なれば、笈の中に入れ、具に藥籠を以て蠟燭宮にして、火打宮にも兼用しなるべし、

〔本朝世事談綺正誤〕一印籠

印籠は、元來、印判印肉を入具なり、今藥を入る藥をたしむ物を藥籠と云、印籠の一種なるものなり、蓋を中にて合せ、風の入らぬやうにしたるなり、今箱に藥籠蓋といふは、この藥籠より起るこ